

氏 名	中澤信彦
-----	------

(論文内容の要旨)

本論文は、「イギリス保守主義の政治経済学」という主題のもと、バークとマルサスを対象として過去10数年間に執筆・刊行された10編ほどの論稿を元に、それらに加筆修正をし、さらに2章の書き下ろしを加えて形成された、長期にわたる研鑽の成果である。

全体は4部に分けられ、序章で本論文の概要が説かれたあと、第1部は「イギリスにおけるフランス革命」(第1章)、第2部は「バーク研究」(第2～5章)、第3部は「マルサス研究」(第6～8章)、第4部は「バークとマルサス」(第9～10章)となっている。

第1章「〈イギリスにおけるフランス革命論争〉を概観する」では、バークとマルサスの背景として圧倒的に重要なこの論争を回顧し、プライス、ペインの自然権論と時効・古来の国制・歴史・伝統に依拠するバーク、自由で平等なユートピアと人間の完成可能性を夢見る空想的なゴドウィンと、富と人口の対立から生じる貧困の暗い現実を直視するマルサスの現実主義を、革命論争の文脈に位置づけている。

第2章は「バークの経済思想」を扱う。重商主義とも関連する伝統的なモラル・エコノミーとスミス以来の自由主義は、「穀物」取引の統制管理か自由化かをめぐって論争を展開した。1795年にはスピーナムランド法として知られる救貧制度が地域的に実施されるが、『穀物不足論』を書いたバークはそれに批判的であった。バークは穀物も労働も自由市場でよいとしたが、その真意は宗教と慈善がその欠陥を補完するという主張にあった。

第3章「初期バークの文明社会認識」は、初期バークの著作、すなわちボリングブルックを模倣して逆説的に自然社会論を批判した『自然社会の擁護』と、本国によるアイルランド統治にアンビヴァレントな感情を漂白した『カトリック刑罰法論』を分析して、「漸進的改革論としての近代保守主義の原風景」を浮かび上がらせている。

第4章「バークにおける革命概念と時間認識」は、ペインの革命概念と比較して、バークが「復古的な回転運動としての革命」の概念——それが革命の本来の語義である——をアメリカ革命の時代にもフランス革命の時代にも一貫して持ち続けたことを指摘し、アメリカ植民地がイギリス帝国の一環であり続けることこそ「革命」であるとする時間認識の保守性に、バークの一貫性を見いだしている。

第5章「バークにおける政治家の条件」は、政治家の枢要な徳としての「慎慮」の概念分析を通じて、バークもまたシヴィック・ヒューマニズムの伝統の継承者であったことを確認するもので、貴族政治家の腐敗を批判するバークは「慎慮」の徳を体現した、商業社会の中流身分から輩出する「本性上の貴族」が政治的実権を持たねばならないと主張したことに注目する。そしてバークの政治家論と階層秩序観

は、共和主義、商業社会の擁護と密接に関係しており、ここに「バークの保守思想の近代性」が明確に示されているとする。

第6章「マルサスの政治思想」は、先駆的なウィンチの示唆に導かれて、マルサスを「フォックス派ウィッグ」として解釈する。様々なテキストに散見されるマルサスの政治的発言を、国制危機、ウィッグの分裂、救貧論争という歴史的な文脈のなかで読めば、フランス革命の伝播を恐れて自由を抑圧したピット政府に対決して、フランス革命を擁護し伝統的自由を守ろうとしたフォックスにマルサスが共感していたことが分かる。マルサスは政治経済学の言語によって同派の活動を擁護したという大胆な説が押し出されている。

第7、8章は「マルサスのスミス受容」を主題するもので、第7章では『人口論』初版が人口学の書物にとどまらず、『国富論』を継承した経済学の書物であることを強調し、『食糧高価格論』から『政治経済学原理』までを対象とする第8章では、スミスの「程度に関する有効需要」概念とマルサス独自の「強度に関する有効需要」概念を区別すべきであり、この区別に導かれてマルサスは一般的供給過剰の理論に至ったのだという解釈を提示する。そして食糧高価格とナポレオン戦争後の不況という現実から出発して演繹体系を形成したマルサスはリカード以上にスミスの継承者であったと言う。

第9章「慎慮の政治経済学」はバークとマルサスの「保守主義の政治経済学」の差異に目を向け、バークの慎慮は中流が上流へ上昇転化する政治的な徳、マルサスのそれは下層が中層へ上昇するための経済的な徳であり、またバークではエコノミスト＝財政家による腐敗の除去、マルサスでは貧民の境遇改善のための早婚の自制、教育政策が重視されていると主張する。

第10章「階層秩序と経済循環」では「存在の連鎖」という伝統的な世界像が、バーク、マルサスの階層秩序や経済循環の思想に大きな示唆を与えていることが主張される。商業社会の安定と発展は、バークでは中層と上層の緩やかな階層移動と不可分であり、マルサスでは下層の中層への上昇、中層の肥大化と不可分であったから、階層間移動の内実は異なる。しかし、両者ともに階層秩序の固定化・水平化には反対した。ここに二つのタイプの「保守主義の政治経済学」がある。

氏名	中澤信彦
----	------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、バークとマルサスが、保守反動ではなく、啓蒙思想の一ヴァリエーションとしての保守主義の思想家であり、「イギリス保守主義の政治経済学」を形成したと主張するものであるが、この主張を、二人の複雑な知的生涯の総合的分析によって描き出す思想史の視点からではなく、要旨で見たような経済学史上の重要なトピックを掘り下げて論証を試みた意欲作である。どの章でも通説に満足しない独創的な考察が見られる。文章も優れ、論旨はすこぶる明快である。

本論文の目的は「保守主義と呼び習わされてきた思想潮流の中に、バークとマルサスの政治経済学を歴史的に位置づけ、その作業を通して保守主義という思想潮流それ自体の内容を豊饒化させる」ことである。保守主義とは何か。それは「人間理性の限界性と人間社会の複雑性の認識に基づきながら、保守すべき価値を積極的にかつ慎重に選択して現存社会秩序の枠内で改革を達成しようとする、一個の近代思想である。」これは、周到に吟味された定義であり、本論文を通じて、バークとマルサスに即してこの定義が適切であることの論証が目指されている。

では本論文は何を実現したか。第一に、バークの政治経済学は、これまで誰一人明確にしてこなかったが、著者によれば、スミス流の生産と流通を包括する経済構造分析ではなく、財政学というべきものである。伝統的なモラル・エコノミー（貧民の生存権を守るための穀物統制思想）を退け、自由市場を擁護したバークは、市場の失敗はキリスト教の伝統に依拠して慈善に委ねてよいと考えていた。国家財政は冗費をなくし、賢明な管理を行なって、国家破産を回避し、共通善を実現しなければならず、それが彼の政治経済学の目的であった。このようにバークはモラル・エコノミー（トムスン）でもなく、スコットランド啓蒙の自生的自由主義思想でもなく、独自の政治経済学を抱懐していたことが明確にされた。

第二に、国家の共通善を実現すべき為政者は、腐敗政治家であってはならず、慎慮の徳が必要である。そのような為政者は必ずしも世襲貴族に見いだされない。バークの慎慮の概念は「本性上の貴族」が為政者となる武器であり、政治家の条件であって、ここにシヴィック・ヒューマニズムの継承が見られる。著者のユニークなシヴィック説は、緻密な分析を積み重ねて論証され、説得力をもつようになった。

第三に、マルサスの政治思想は、フォックス派ウィッグと見なしうるという論証が、各種テキストに散在する発言とコンテキストの分析から精力的に展開された。これはウィンチが示唆に留めたものであるが、本論文は、緻密な考証を積み重ねて説得力を高めている。マルサスとスミスの厚い継承関係も論証されたが、それはスミス、リカードの単線的な継承関係だけしか見ない通説批判である。

第四に、バークとマルサスの「慎慮の政治経済学」が把握した文明社会は、存在の連鎖の思想に示唆された、階層制的な、階級移動がある社会であって、バークにあっては中流から「本性上の貴族」が政治的洞察力としての「慎慮」の徳によって

上流の為政者層へと上昇し、マルサスにあっては下層の労働者階級が、勤労と道徳的抑制＝「慎慮」の徳によって、中流へと上昇するものとして把握されていることが明らかにされている。ただし、マルサスの論は蓄積論、産業発展論がないと説得力を欠くであろうが、この点の考察は欠いている。

著者の貢献は以上に尽きないし、著者の明快で先鋭な分析は、見事に「イギリス保守主義の政治経済学」の輪郭を浮かび上がらせていると評価できる。しかし、その成果は、細部を削ぎ落とし、周辺部を排除することで実現されたのであって、そのマイナス面も多々存在する。いくつかを指摘しよう。

バークにとってアイルランドは重要であった。彼がアイルランドに期待した展望、「分散した土地所有に伴う勤勉」、「農業と商業の幸福な同盟」、「イギリス商業帝国の農業部門を担いながら経済的にも道徳的にも繁栄するアイルランド」はどのように実現できるのか。その道筋を著者が追究していないのは残念である。

また、腐敗政治家の転落、慎慮による「本性上の貴族」の上昇の思想が、具体的にどのような社会構造と政治状況のなかで主張されているかという、歴史的現実の分析と描写がなく、具体的なコンテクストとの関連づけが弱いので、バークの政治哲学の確認にとどまっている。マルサスに至っては、遂行された研究は一部に過ぎず、フォックス派ウィッグ説の論証は詳細で啓発的であるものの、マルサスの全体像の把握には至っていない。

著者の保守主義の定義も磐石とは言えない。説得力があるのも事実であるが、しかし、著者の定義が普遍化できるかどうか疑問である。保守主義のなかに継承と発展、伝統と革新の両方が含まれるとされているが、反動でも急進でもない保守主義と自由主義とはどこが違うのか。自由主義は、自由、平等、寛容、人権、同意などの概念を核において継承と発展を説く思想である。保守主義の選ぶ価値は何か。結局は古来の国制、伝統・慣習、階層制社会であり、発展よりは秩序であり、支配と従属なのではないだろうか。保守主義の原理とは何か。はたして自由主義や共和主義のような原理があるのか、疑問が残る。

バークとマルサスという偉大な思想家を取り上げ、従来の研究史が無視した前者の政治経済学、後者の政治思想の解明に果敢に取り組み「イギリス保守主義の政治経済学」の骨格を大胆かつ明確に描き出そうとした著者の努力は貴重であり、その目的はほぼ達成された。しかし、それを十全に成し遂げるためには、著者自身が自覚しているように、さらに議会改革、アメリカ論争、東インド統治問題、フランス革命論争、マルサス-リカード論争などの、著者が分析から排除した大イシューに取り組むと共に、より複雑な論争の文脈、背景との関連を辿りながら、いっそう込み入ったテキスト分析を詳細に遂行することが、おそらく要請されたはずである。

こうした課題も残されているが、しかし本論文の成果自体は揺るがない。よって本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成21年6月23日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認められた。